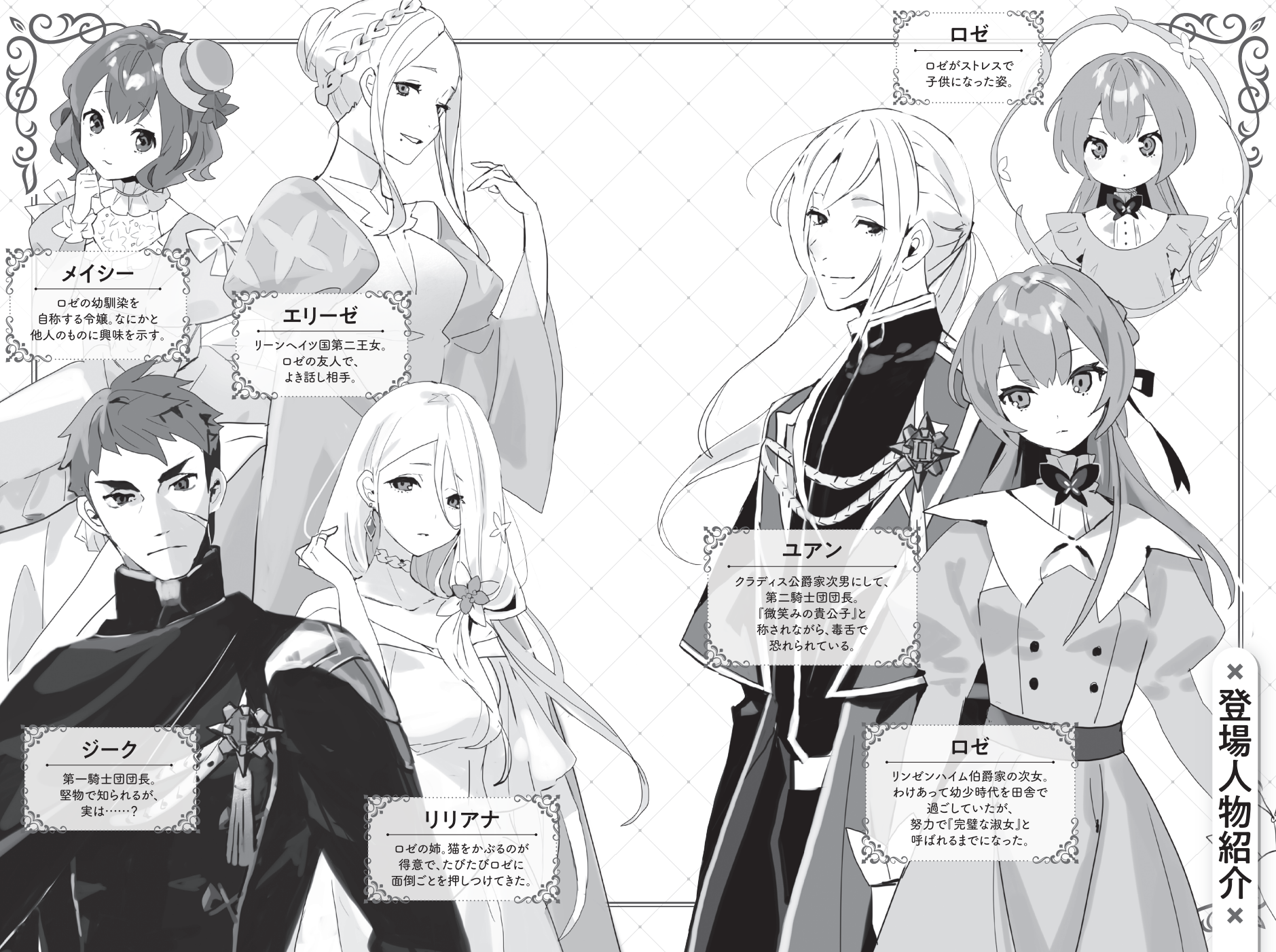


子ども扱いしないでください！

く幼女化しちゃった完璧淑女は、騎士団長に甘やかされるく



メイシー

ロゼの幼馴染を
自称する令嬢。なにかと
他人のものに興味を示す。

エリーゼ

リンヘイツ国第二王女。
ロゼの友人で、
よく話し相手。

ジーク

第一騎士団団長。
堅物で知られるが、
実は……？

リリアナ

ロゼの姉。猫をかぶるのが
得意で、たびたびロゼに
面倒ごとを押しつけてきた。

ロゼ

ロゼがストレスで
子供になった姿。

ユアン

クラディス公爵家次男にして、
第二騎士団団長。
『微笑みの貴公子』と
称されながら、毒舌で
恐れられている。

ロゼ

リンゼンハイム伯爵家の次女。
わけあって幼少時代を田舎で
過ごしていたが、
努力で『完璧な淑女』と
呼ばれるまでになった。

第一章 完璧すぎて婚約破棄された結果

私には頭痛の種が三つ——いや、三人いる。

私、ロゼⅡリンゼンハイムの人生は、これまで彼らにかき回され、振り回されてきた。だからこんな華やかで賑わう社交の場においても、その影響が色濃く及んでいる。

「ロゼ様、今日も素敵ですわ。橙色のドレスがストロベリーブロードによくお似合いでいらつしやいます」

「どうしたらそのような綺麗な髪の色になれるのでしょうか。私もロゼ様のようになりたくて植物の染料を試したり、太陽に当ててみたりしたのですが、そんなお色にはなりませんでしたの」

「水色の瞳も理知的で素敵ですし、所作も美しく、ダンスは皆様の注目を一身に集める——。まさに『完璧な淑女』であるロゼ様には、憧れるばかりですわ」

ほうつと頬に手を当てて感心した様子の令嬢たちに、私は微笑みを返す。

「ありがとうございます。皆様にそうおっしゃっていただけて、光栄ですわ」

完璧な淑女——そう呼ばれるようになって、私に対する評価はガラッと変わった。

みんなが褒めるこの髪も、以前は『下品な髪の色』と蔑まれていたのに。

隣のテーブルから聞こえてくるあの声にも、さんざんことを言われてきた。

「まったく近頃の若い方にはあきたものだわ。そのドレスはなんですか？ 透けた袖だなんて品の悪い……」

声の主はシルバークレイの髪に茶色のドレスを着たアンダルソン伯爵夫人だ。

その目の前で縮こまっているのは、髪を高い位置でお団子結びにした令嬢。確かユナ様といったか。

放っておけば夫人のお小言はいつまでも続くと、身をもって知っている。令嬢たちに軽く挨拶をすると、私はにやかな笑みを作ってアンダルソン伯爵夫人に近づいた。

「お久しぶりです、アンダルソン伯爵夫人。あら、そちらのユナ様のドレス！ もしかして、ミール衣装室のものでは？ 時代を先取りしたデザインとの評判に違わず、とても素敵ですわ。一ヶ月もすれば皆様が真似をして、新たな流行が生まれるかもしれませんわね」

私の言葉を皮切りに、周囲からも「まあ、斬新なドレスだわ」「素敵」と囁きが聞こえはじめる。

「……ふん。田舎者の『元野生児』が、ご立派なこと」

この場に味方はいないと悟ったらしいアンダルソン伯爵夫人は、私にだけ聞こえる小さな声で捨て台詞を吐き、立ち去った。

どんなに周囲が見方を変えても、彼女だけは相変わらずだ。

『田舎者』『元野生児』——まだ幼い頃、王都に暮らす家族のもとから離れ、それから六年間も遠方の領地トルハイイツで暮らしていた私は、かつてそんな風に呼ばれていた。

一年のほとんどを王都で過ごす貴族の人々は、田舎への偏見が強い。

昔は地方の衛生状況が悪かったせいだろうけれど、土も空気も健やかになつたいまでもその価値観は根強く残っている。

どれくらい強いかというと、そこで育った人も作られた食べ物も受け入れないくらいだ。

なぜいたいけな少女だった私がそんな田舎の領地へ一人追いやられるはめになったのか——

それこそが頭痛の種の一人目、姉リリアナの所業によるものなのである。

きっかけは六歳の時、私たち姉妹の跡継ぎ教育がはじまったことだった。

私がリーンヘイツ国では女も爵位を継ぐことができる。となれば大抵の父親は『婿になど爵位を譲るものか』と考えるわけで、我が家も例に漏れず、第一子であるリリアナを跡継ぎに、という運びとなったのだ。

その跡継ぎ教育を、ついでだからと私も一緒に受けることになった。真面目に勉強に取り組んだからか、一つしか年が違わないせいか、私は姉よりいい成績を取ることが多かった。

それが気に食わなかったらしい。リリアナは、両親に『ロゼが私の邪魔ばかりして勉強に集中できないの』と泣いて告げ口をした。

周到なのが、まず家庭教師の悪行を捏造してクビにさせ、真実を知る者を追い出したこと。おかげで私がいくら弁明しても、怒られるのが嫌で嘘をついているのだと見られた。

それに両親も、まさかまだ七歳の娘が滔々と涙を流しながら人を貶めるような嘘をつくとは思わなかったのだろう。

姉は幼い頃からの日常的な猫被りで堂に入っていて、父は仕事で家にいないことが多く、母は病弱で臥せってばかりいたから、姉の本性に気づいていなかった。

リンゼンハイム伯爵家として最も重要なのは、跡継ぎであるリリアナに教育を受けさせること。結果として私はトルハインツで一人家族と離れて暮らすことになった。

その経験から、私は幼いながらも『真面目に励んだからといって、いい結果に繋がるわけではない』ということを学んだ。

だから私は、自由に生きることにした。

近くの町の子供たちと一緒に野を駆け山を駆け、近くで剣術を教えている人にならって剣を振り、それはもう充実した日々を過ごした。

母は私が一人きりになってしまふことを気にかけて、病から回復した合間に会いに来ようとしてくれたけど、そのたびにまたまリリアナが病気になったため、それが叶うことはほとんどなかった。

寂しくないわけではなかったけど、領地にいる使用人たちや近くの町の人たちがとてもよくしてくれたから、辛くはない。

むしろ毎日が楽しくて、私はトルハインツでのびのび育った。

だから姉のことは恨んでいなかった。

それなのに。

私が十二歳の時、今度は姉が跡継ぎ教育に嫌気が差してトルハインツにやってきたのである。

『淑女教育だけでも大変なのに、領地管理にこの国の基本法？ 跡継ぎ教育って、そこまで覚えなきゃならないの？ そんな面倒なこといい加減やってられないわ！』

そう言ってリリアナは、表向きには病氣療養ということにしてトルハインツの屋敷に引きこもった。

人を追い出しておきながら、六年も経っていまさらなにを言っているのか。

せっかく楽しく暮らしていたのに、振り回すのもいい加減にしろとさすがに腹が立ったけれど、そうして仮病を使って領地に逃げ込まれては、私が王都に戻るしかない。

『跡継ぎなんてどちらかなればいいだけの話なのだから、あなたがなればいいのよ』

そう言って部屋から出てこないものはどうしようもないから。

その時母はすでに亡くなっており、父には『あれ、仮病ですよ』と手紙で伝えたものの、『真偽がどうあれ、部屋から出てこないものはどうしようもない』と私と同じ意見が返ってくるのみだった。

どうやらほとんど家にいなくても、十数年父親をやっているうちになんとなく姉が猫被りであることは察したらしい。

だったら、こんな時くらい娘のために動いてほしいものなのだが。

ただ、私とていつまでも奔放に遊び回っているのは口々な大人にはなれない。これもいい機会かと聞き直った。

かくして王都に戻った私は、田舎者だの元野生児だのと揶揄されながらも、サボっていた淑女教

育と跡継ぎ教育の六年分の遅れを取り戻すため勉強とレッスンに明け暮れた。

幸いにも遊び惚けて空っぽだった頭は物事をよく吸収してくれたし、野山を駆け回っていたおかげで体幹がよくなったせいなのか、ダンスもマナーもすると身についた。

もちろん、たった五年でここまで至るには血の滲むような努力が必要だったけれど。

おかげで今度は頑張った分だけ正當に評価され、私に向けられる目も変わっていった——その結果与えられたのが、『完璧な淑女』の称号なのである。

「ロゼ様、助けていただいてありがとうございます」

ユナ様がぺこりと頭を下げると、お団子に結んだ髪がぽよんとかわいらしく弾んだ。

「私は正直な感想をお伝えしただけですわ。それに、皆様もユナ様のドレスが気になる様子でしたもの」

そう言うと、近くにいた令嬢たちがにこやかに歩み寄る。

「ええ、本当に素敵ですもの。私も作っていただきたいわ」

「アンダルソン伯爵夫人には困ったものですわね。『近頃の若い方は』って、いつもそればかり」

価値観を時代に合わせるができないのだろう。茶色ばかりを身につけているのも、夫人が社交界デビューした頃に流行っていたからなのだという。

ドレスコードやマナーに違反しているわけでもないのにあして他人のドレスに文句をつけるのは、そんな自分が脅かされるようで怖いかもしれない。

自分が身につけるものにこだわるように、他人だってそれぞれに価値観や好みがあると認められ



たら、楽になれるだろうに。

「ロゼ様がお店をはじめた時も、うまくいくわけがないなどとАндタルソン伯爵夫人はとやかくおっしゃっていましたものね」

「夫人にはおあいにくですけど、皆様のおかげでお店のほうも順調にいつておりますわ」

彼女らが話しているのは、私が王都に構える店『ロニアナ』のことだ。

貴族相手の商売が軌道に乗り、いまではなかなか評判の店となっている。

その店の経営も、領地に引きこもったリリアナが好き勝手に散財したせいで、家が傾きかけたからはじめたのだけれど。

『なあーんにもないこんなところで心を健やかに保つには、美しいものを愛でるほかないのだから、仕方がないでしょう？』

そう言ってドレスだの宝石だのを買い集め、その他にはなあーんにもしなかったから、その尻ぬぐいも私がやるしかなかったのだ。

私にとっては当主代理も店の経営も楽しくはあったし、得るものもあつたからそれはそれでいいけれど、いつまたリリアナがなにかやらかすかと思うと、不安で頭痛がしてくる。

「ところでロゼ様。ジョセフ様の姿をお見かけしませんけれど、私たちお邪魔してしまいましたかしら」

気がついたように周囲を見回した令嬢に、笑みを浮かべてみせる。

「お気遣いありがとうございます。彼はまだ挨拶回りをしているのだと思いますわ。皆様もそろそ

ろお時間かしら」

「そうでした。久しぶりにロゼ様とお話しできて、つい時間を忘れてしまいましたわ」

「私はまだ婚約相手もおりませんので、どなたかいい人を見つけなくては」

令嬢たちがそれぞれに去っていくと、私はその場に留まり、飲み物をもらって喉を潤した。

わざわざあの陰鬱な顔を捜し出すつもりなどない。

『完璧だの、淑女の憧れだのと過剰に騒がれる君の隣にいと、窮屈だ』

私の顔を見るとそんな風に言うのが私の婚約者、ジョセフⅡロガート。私の頭痛の種の二人目だ。彼は私との婚約を納得していない。

元婚約者であるリリアナに、いまでも想いを残しているからだ。

『リリアナならロゼよりもっと素晴らしい淑女になつていただろうに。病弱なせいで跡継ぎの座だけでなく、婚約相手まで妹に渡さなければならなかったなんて……』

そう呟き、ため息をついてみせるジョセフだけれど、まさかそのリリアナが『あんな陰鬱な男と結婚なんて嫌！』と私に押しつけたのだとは、いまだ知らずにいる。

知らないほうが幸せなこともある。

私とて誰かに押しつきたいが、そうもいかない。この婚約は、うちの父がジョセフの父であるロガート伯爵に恩があり、彼の三人もいる息子の一人を婿として引き取ることになったという、いわば家と家との約束だ。

それでも結婚すれば一生をとにも過ごさねばならないのだし、いつも陰鬱な顔のため息ばかり吐

かれていてはこちらの気が滅入るから、歩み寄ろうと努力をしてきた。

しかし一方の努力だけでどうにかなることではない。ジョセフとの溝は埋まらないまま、私が十八歳になる一年後に結婚式を挙げることになっていた。

だがここに来て彼は、去っていった元婚約者の幻ではなく、現実を見るようになったらしい。ただしそれが目の前の私ではないというところがさすが頭痛の種である。

「ロゼ。話がある。ついてきてくれないか」

グラスを置いたところで、後ろから唐突にそう声をかけてきたのは件の婚約者だ。

茶色のくせつ毛に茶色の瞳。その顔には相変わらず覇気がないばかりか、今日は何にか後ろめたそうに視線が落ち着かない。

「それはわざわざ人様のパーティで、場所を変えてまで話さなければならぬことなの？」

「いや、そういうわけではないが、こういう話は早いほうがいいから」

それはそちらの都合だろう。

私はため息を押し隠して頷いた。

「わかったわ」

どんな話かは察しがついている。

向かった先に誰が待っているのかも。

了承を伝えると、ジョセフはふいっと視線を逸らして「こちらだ」と背を向けた。

横に並ばず後をついて歩くと、中庭へ出た。

ここにはいま、他に人はいないようだ。

予想した通りの彼女を除いては。

「あつ……、ロゼ様」

「ごきげんよう、メイシー。お待たせしてしまったようね」

そこにいたのは、頭痛の種の三人目、メイシー＝ソフィアス男爵令嬢だ。

彼女は両の手を組み合わせ、うるうるとした瞳で私を見つめる。

肩までの黒い巻き髪がふわふわと輪郭を覆い、甘い顔立ちを引き立てていた。

見事なまでに物語のヒロインに浸りきっている。

「ごめんなさい、ロゼ様！ お怒りになるのはごもつとでもです。それでも、私——！」

まだ私はなにも言っていないのに、この盛り上がりよう。すでに彼女は舞台に立っているようだ。

「いいんだ、メイシー。ここは私が話すから」

親しげにそう呼びかけたジョセフはメイシーの隣に立つと、私に陰鬱な顔を向けた。

「ロゼ。君は完璧だ」

そんなため息混じりの声で言われて、それを褒め言葉だと捉える人間はいない。

「王都から遠く離れた田舎で六年間も無為な時間を過ごしたものの、遅れていた教育を取り戻して見せた。冷たい水色の瞳と、それとは対照的に品がなく見える赤みがかった金髪も、君の淑女らしい態度で補えていると思う。つまり、君は非の打ちどころのない存在だ」

こんなにも褒めていようで褒めていない、認めたくない気持ちが溢れる言葉を聞いたことはない。

「そんな君の隣に私の居場所はないし、なにより息苦しい。比較されるのもたまらない」
うんざりしたようにそう言うと、ジョセフは苦々しげに顔をしかめた。

田舎から戻ってきた私に侮蔑の目を向けていたくせに、努力で評価を得たらこれだ。

それもそれなりの努力をした人に言われるならばまだしも、貴族の名にあぐらをかいて、ただ家でだらだら過ごしているだけのジョセフに言われたくはない。

「それにロゼは事業も興しているし——」

私への賛辞はまだ続く。

本題が言い出しにくいのはわかるが、まどろっこしいのは面倒だ。

「ご用件は？」

単刀直入に促すと、彼はためらいながらも顔を上げた。

「だから、ロゼは一人でも生きていけるだろう？ でもメイシーはそうじゃない。私が支えてやらねばならないんだ。だから……」

彼はこの期に及んで言い淀む。決定的な言葉を下さねばならない自分たちを哀れむように、隣に立つメイシーと悲愴な目を見交わす二人は、さながら舞台役者のようだ。

自分に酔っている彼らに付き合うほど暇ではない。

「私との婚約を解消したいと、そういうことですね？」

「そうです！ 仕方がないことだと諦めてください、ロゼ様。私とジョセフ様は惹かれ合ってしまったのですから」

メイシーはジョセフを見つめ、ぼつと頬を染めてみせる。対してジョセフは陰鬱な顔で続けた。

「すまない。君のような完璧すぎる女と結婚したがる男などいないだろう。代わりの婚約者探しは難航するかもしれない。それでも私は、メイシーを見捨てることができないんだ……恨んでくれていい。ただ、私を自由にしてほしい」

恨んでくれていい、とは、自分がどれほどの人物だと思っているのだろうか。

こちらとしてはあまりに想定内すぎる展開で、ため息をつく気にすらならない。

彼が最近、メイシーにご執心なことは知っていた。

そして、メイシーは他人のものが大好きなのだということも知っている。

いろいろ言いたいことはあったけれど、彼らにそれを放つことに意味はない。

私の人生にはもう関わりがないのだから。

そしてなにより、自由を得られるのは彼らだけではない。

「承知しました。どうか一生その愛を貫き、二人仲睦まじく、健やかに生きてくださいね」

完璧な淑女の仮面を被り微笑みを浮かべると、私はくると踵を返した。

「ロゼ様、ありがとうございます！ 私、きっと今度こそ幸せになりまーす！」

背後にメイシーのそんな声が聞こえたけれど、振り返りはしなかった。

事実を知った後も、同じことが言えるといいけれど。

リンゼンハイム家に婿入りしなくなったからといって、ジョセフがロガート伯爵家を継ぐことはない。

ロガート伯爵の三人いた息子のうち、確かに長兄は残念ながら数年前に亡くなっているけれど、ジョセフの弟トマスが跡を継ぐ前提で、侯爵家三女と婚約を結んでいるのだから。

彼らが独断で突っ走ってくれて助かった。ロガート伯爵が知ったら止めたはずだから。

伯爵は私のことをいたく気に入ってくれていて、正式に結婚する日を心待ちにしていたから、勝手なことをしたジョセフを許すはずがないし、尻軽で有名なメイシーを伯爵家に迎え入れるとは思えない。

そんな行き場を失ったジョセフに、あのメイシーが喜んでついていくとも思えないのだが。

まあ、彼らがこの先どうなるうと、私の知ったことではない。

私はさっさと屋敷へ帰ると、まずは父に宛てて手短に手紙を書いた。もともと父も乗り気ではなかったから、この婚約解消には承諾してくれることだろう。

これで、ロガート伯爵が後から事実を知ってもなかったことにはできない。

私は自由になったのだ。

やることを済ませるとベッドにぼすりと横になり、大きく息を吸った。

もう陰鬱な婚約者に気を使うことも、メイシーにつきまとわれることもない。

頭痛の種が一気に二人片づいたのだから、その解放感は大い。

思えば、メイシーとは腐れ縁だった。

私がトルハインツへ行く前、確かに面識はあったが、友人になったつもりは一度もない。

それなのに私が王都に戻り、やっと足場が固まってきた頃、パーティーで令嬢たちと親交を深めていると、いつの間にか隣にいて『私たち、幼馴染なんです』と話に入ってきたのだ。

まあ別に無害だし、と放っておいたのがいけなかったのか。それから彼女は私につきまとうようになった。そしてなにを思ったのか、私の真似をしはじめた。いつの間にか上目遣いや甘ったるい喋り方をやめ、私の仕草や喋り方をぎこちない動きで模倣する。

そのうち人目がある中で同情を誘うように指輪やネックレスを欲しがり、挙句ドレスまでねだってくるに至り、私もさすがに断って、なんとか距離を取ろうとしたものの、逃げれば逃げるほど詰め寄せられた。そしてメイシーはどこで見つけたのか、はたまた作らせたのか、似たようなデザインのものをも身につけるようになった。

私とメイシーは顔立ちも違うし、髪も瞳の色も違う。だから似合うものは違うのに。

違うのは外見だけでなく、中身もだ。

私がよく事業のことなどを話していた子息たちに、メイシーが片っ端から声をかける姿も見たが、思ったような成果はあげられなかったようだ。

どうやらメイシーは私の真似をして、手っ取り早く同じような地位を築こうとしたらしい。

『生まれが違っただけで私はなにも持っていないんだなんて、不公平だわ。ロゼ様はなんでも持っているのに。早く男爵家から抜け出したい……』

うまくいかないと嘆きながら、メイシーは深いため息を吐き出してそう言った。

伯爵家に生まれた私が恵まれているというのは事実だ。苦勞はあれど、毎日美味いご飯を食べられるのだから。

けれど、メイシーがなにも持っていないなんてことはあるだろうか。

メイシーの濡れたように黒く光る大きな瞳は庇護欲をそるし、甘い顔立ちは人目を惹く。声も高くてかわいらしい。

メイシーにはメイシーの魅力がある。

なにより、いまも両親が健在だ。見かける度にいつも穏やかに笑っていて、メイシーが愛されているのは傍目にもわかった。

だから私はある日、メイシーにこう告げたのだ。

『メイシー。ないものを求めるのも大事だけれど、自分が持っているものに目を向けるのも大切よ』

すると、彼女は『私は間違っていました』と目を輝かせた。

そしてその日を境に私の真似をやめ、今度は自分に似た令嬢の相手を奪うようになった。

自分に似た人を好きになった相手なら、自分のことを好きになると思ったらしい。

以来、メイシーの噂はあつという間に広まった。

令嬢たちはメイシーを遠巻きにするようになり、婚約者や恋人には『メイシーには決して近づかないで』と、きつく言い渡すようになった。

それでメイシーも大人しくなるかと思いきや、今度は自分と似ているかどうかは判断基準から外

してとにかく人のものを狙い、対象を広げていった。誰かが好きになったり婚約を結んでいたたりするということは、それだけの価値があると考えたようだった。

そうして巡り巡って、私は再び彼女のターゲットになったわけだ。これまでさんざん私につきまとっていたのだから、もっと早くジョセフをもらって欲しかったらよかったのに。

たぶんジョセフはあまりメイシーの好みではなくて、噂が広まりすぎて誰にも相手にされなくなり、仕方なく妥協したのだろう。私がジョセフに『メイシーに近づかないで』なんて言うわけもなく、無警戒の彼は簡単に箝絡されたわけだ。

これまでの歩み寄りは何だったのか、私の努力はどこへ行くのかと徒勞感がのしかかるけれど、これでやっとメイシーが落ち着くなら、それでいい。令嬢たちも一安心だろう。

今日はなかなか疲れた。貴族がたくさん集まる社交の場合は、何度出席しても苦手だ。

ごろりと寝返りをうち、赤みがかった髪を手取る。

今日一日で褒められも、貶されもしたこの髪は、社交界の評価なんていい加減なものだという象徴だろう。

私への評価が変わったことで、それまで悪し様に言われていたものまでくつがえる。

私の本質も、髪も瞳も変わってはいないのに。

私はベッドから起き上がると、クローゼットを開けた。

端に立てかけてあるのは、一本の木剣。手に取ると肌に馴染むような感覚がある。

これにくれたのは、子供の頃にトルハイイツで剣術の稽古をしていたおにいさんだ。

顔も名前も忘れてしまったけれど、とにかく綺麗な人だったことだけは覚えている。

そのおにいさんの剣を振るう姿がとにかく格好よくて、私はそれに憧れた。

剣術の先生に私も剣を習いたいとお願ひすると、親の許可もなく貴族の令嬢に剣を教えることなどできないと、困ったように断られた。

それでも諦めきれず、稽古の様子を遠くから眺めていた私に、おにいさんが渡してくれたのがこの木剣だ。もうこれは体に合わなくなったからと言って。

おにいさんも私が剣術に興味を持ったことに驚いてはいたけれど、駄目だと遠ざけることも、『貴族の令嬢のくせに』と笑うこともなかった。

それから先生は、私が勝手に真似ているだけ、という体裁で、そこで一緒に木剣を振るうことを許してくれた。

うっかり日暮れまで稽古に夢中になってしまったある日。おにいさんは私を屋敷に送り届けてくれながら、地平線近くに浮かぶ赤い月を眺めて言った。

『その髪はあの月と同じ色だね。瞳も、暮れたばかりの透き通るような空と一緒だ。暗くなってもなお輝こうとしているような色で、家族と離れて暮らしていても明るく笑っている口ゼによく似合っているよ』

おにいさんは、領地に一人飛ばされた私が野を駆け山を駆け遊び回っているのを、ただただ能天気なわけでも、自棄になっっているのでもないことをわかってくれていたのだと思う。

その言葉は私の胸にしんと沁みて、強く残った。

だから私は生まれ持った容姿を悪し様に言われようと、表面的に褒められようと、本質ではないところで語られる言葉なんてどうでもいいのだ。

木剣を一振りすると、いまの私には少し短いのに、重く感じる。

中身は変わらないのに、あの頃が遠い。

私は木剣をクローゼットに戻し、再びベッドに横になった。

自分勝手な人たちに振り回され、徒労感ばかりがのしかかるこんな日は、どうしても思ってしまう。

野山を駆け回り、剣を振り回していたあの頃に戻りたい。おにいさんのように、ありのままの私を見てくれた人がいたあの地に帰りたい。

ロクにお別れも言えないままだったし、どこの誰かも知らないあのおにいさんがいまもトルハインツにいるかなんて、わからないけれど。

そんなことを思いながら眠りについた。

翌朝目覚めると、全身がむずむずと痒かった。

これはまずい。あの前兆だ。

頭痛の種から解放されてスッキリしたと思っていたけれど、それでも心身ともに疲れはあったのだろう。

なのに、今日は城に行かねばならない。年の近い第二王女エリーゼ様の話し相手として、定期的

に城へ呼ばれているからだ。

せめて明日だったらよかったのに。

タイミングの悪さに、ため息を吐き出す。

——もう少し、もってくれるといいけれど。

おそらく今日のうちにそれは起こるだろう。

自分の体なのに、いくら努力をしてもこればかりはどうにもならなかった。

いや、努力をすればするほど、悪循環に陥っていくのだ。

そうはわかっていても、頭痛の種たちが私に絶えずストレスを送ってくるのだから、いかんとも
しがたい。

疲れた体を引きずってなんとか無事に王宮に入ったのだけれど、運の悪いことに令嬢方の一群に
出くわしてしまった。

リーナ様とサンドラ様一派だ。

「あら、ロゼ様ごきげんよう。本日もエリーゼ様とお茶にいらしたのですか？」

すでに無意識にかいてしまいうるなほどに痒みが強くなっている。時間がない。

早く人目のないところに行かねばならないのに。

焦りを押し隠し、『完璧な淑女』の仮面をしつかり被り直してから、声をかけてくれたサンドラ
様に笑顔を向ける。

「ええ、これからお伺いするところですよ」

「王女様の信頼も篤いだなんて、さすがロゼ様ですわ。今日のドレスも素敵ですし」

「ありがとうございます。皆様はどちらへ行かれるところだったのですか？」

矛先を私からズラそうと話を向ければ、いつもは堂々としたお姉様風なサンドラ様が、珍しく恥
ずかしそうに頬を染めた。

「第一騎士団の修練場に見学に行っていました」

代わりに隣のリーナ様が扇で口元を隠しながらそつと教えてくれた。なるほど、と察する。

「第一騎士団というところ……ジーク騎士団長、ですか？」

「は、はい！ あの凛々しいお姿を一目見たいと……」

サンドラ様をはじめとして、皆様一様に頬をぼつと染めて恥ずかしがるのがかわいらしい。

「私は婚約者がおりますので、そういった対象ではないのですけれど、やはり見ているだけで、そ
の、目に潤いがあると言いますか……」

言い訳をするように恥じらうリーナ様に微笑んで、「わかりますわ」と二つ頷く。

「ジーク騎士団長は騎士団一の強さと言われていますし、筋肉も隆々としていますものね」

「ロゼ様、わかってくださいますか!? そうなんですよ！ いえ、お顔だけでしたら第二騎士団長の
ユアン様のほうが整っていらっしやいますし、『微笑みの貴公子』の通り名の通り素敵の方なの
すけれども、ユアン様は、その……」

「いえ、ユアン様は心に決めた方がいらっしやるという噂もありますし、ね……」

リーナ様は言いかけて言葉を濁し、サンドラ様も曖昧な笑みを浮かべたけれど、言わんとしてい

ることはわかる。

筋骨隆々、寡黙で生真面目な第一騎士団長ジーク様と対をなしてよく語られるのが第二騎士団長のユアン＝クラデイス様。史上最年少で騎士団長の任に就いた実力の持ち主だ。

加えて『微笑みの貴公子』と呼ばれている通り、整った顔に笑顔を浮かべれば令嬢方がふらりとよろめくほどの麗しさに、公爵家次男という文字通りの貴公子。だというのに、とある理由から令嬢方の憧れの対象にならないでいる。

サンドラ様はいらぬ話をしてしまったというように軽く咳払いをすると、話を切り上げた。

「エリーゼ様のところへ向かうところでしたのに、お引き止めしてしまい申し訳ありません」

「いえ、また今度、ゆっくりお話しさせてくださいませ」

令嬢方と挨拶を交わし合い、解放されたことにほっとしながらも、胸中で一人、ぽつりと呟く。

——ユアン様のほうが格好いいのに。誰も本当のユアン様を知ろうとはしないのね。

おかげで第二騎士団の修練場はいつもガラ空きだから、私にとっては助かるのだけれど。

急ぎエリーゼ様のもとへ足を向けるが、痒みはいつの間にかかきむしりたいほどに強まっている。

私は淑女らしさをかなぐり捨てぬよう注意を払いながら、少しずつ足を速めた。

——まずい、まずい、まずい！

痒みを我慢しながらひたすら足を動かし、やっと目的の部屋に辿り着くと、侍女のシンシア様が迎え入れてくれた。

「ロゼ様、どうぞこちらでお待ちください」

「シンシア様、まずいです。早く扉を——」

部屋に通され、なにごとかを察したシンシア様が素早く扉を閉めた瞬間。

思わず肌を擦ってしまいたいほどむずむずしていた体から、突然痒みが消えた。

「——あ」

小さな呟きが漏れるのと同時に、驚いたようなシンシア様の顔が消える。

いや、そうではない。私の視界がぐくんと下がったのだ。

いま私の目の前に見えるのは、シンシア様の紺色のスカート。先ほどまで着ていたドレスが肩にぶら下がっていて、いまはとても重い。

シンシア様は動じることなく、「あらあら」と頬に手を当てる。

「ロゼ様。なにか大変なことがありましたのですね？」

「ええ、昨日抱えていた面倒ごとが片づいて大変スッキリしたのですが、徒労感もその倍でして。いままでの苦労はなんだったのかと思ってしまうたら、もうダメでした」

「なるほど。なんとなくお察しました」

「エリーゼ様がいらしたら根掘り葉掘り聞かれるかと思いますが、その時にお話ししますわ」

「そのおかわいらしい姿ではなにかあったことが一目瞭然ですから、ご覚悟なさったほうがよろしいでしょうね」

そう。いまの私は七歳くらいの子供に縮んでいるのだ。

初めてこんなことが起きたのは、いまから一年半ほど前。

その時は確か、リリアナの散財で家の財政が大変なことになっているのが発覚して、立て直すべく商売をやろうと一念発起したものの、店を建てるための資材を買い付けたら資金を持ち逃げされ、ジョセフやメイシーは相変わらず面倒で、あれこれ重なって「もう嫌だ！ 子供の頃に戻りたい！」と痛烈に思うくらいに疲労感が溜まっていて。

なんだか全身が痒くてむずむずするのを、疲労のせいだと思い我慢しているうちに、突然子供の姿に変わっていたのだ。

居合わせた侍女と二人で頭を突き合わせても、どうしたらいいかわからないまま一日が経ち、医者を呼んだところで姿が戻った。

おかげで『子供の姿に変化した』なんて荒唐無稽な話を信じてもらえて、何度か問診を繰り返して、原因はストレスや疲労だろうということになった。

心身のエネルギーを過剰に消耗したことで、体が消費を抑えようと子供の体に縮むのではないかと。

その理屈には頷きたいものがあつたけれど、魔法や呪いの類であると言われるよりはよほど信憑性がある。大昔にはそんなものがあつたという言い伝えもあるけれど、確かな記述は一切残っていないから。

それに、ストレスと言われれば納得せざるを得ない部分もある。

私は野山を駆け回っていただけあつて体力に自信はあつたけど、のびのび育つたおかげでストレスには弱いのだ。

特に頭痛の種であるあの三人のような価値観の違いすぎる人間となると、話の通じなさに無力感を覚えるし、努力は簡単に水の泡にされるし、とかく振り回され、心身ともにぐったりする。

ただでさえ店の経営や当主代理としての仕事で多忙だったし、常日頃からストレスが溜まっている自覚もあつた。

それになにより、子供の姿に変わるのを繰り返すうち、ストレスが薄れていくと体が元に戻るということもわかったから、納得はできる。

ただ原因がわかったところで、自由に駆け回れる野山はなく、せめて庭で無心に草取りでもと思つても、仕事熱心な庭師が根こそぎ抜いている。

この王都では私がストレス解消する方法など見つからず、姿が元に戻るには、ただ時間が解決してくれるのを待つしかなかった。

このことを知っているのは父と屋敷の一部の使用者、それからエリーゼ様とシンシア様だけ。

エリーゼ様はこんな私の体質を気味悪がるどころか、ただ一人面白がっている。

それは受け入れてくれたということでもあり嬉しかったけれど、出かけた先で姿が変わってしまったかもしれないと思うと外出が不安だった。

だから今後はお茶会を辞したいと伝えたところ、エリーゼ様は言ったのだ。

『リスクがあるからと閉じこもってはかりいては、ストレスは溜まる一方よ。それよりも安全な場所を増やして、安心できる相手を増やして、居心地よく過ごすほうがよほど建設的でしょう？』

ぐうの音も出ないほどの正論だった。

それにその言葉通り、エリーゼ様は城内で私が駆け込める場所をいくつか教えてくれた。

困った時はシンシア様を呼ぶようにとまで言ってくれて、現にこうして助けてもらっている。

そこまでされて引きこもるわけにはいかない。

そうして城に通って話をするうち、それがストレス解消となり、元の姿に戻りやすくなったから、エリーゼ様には感謝している。面白がられているのもやっぱり事実だけれど。

さらにシンシア様はシンシア様で、私が子供の姿になるのを楽しみにしている節がある。

「ロゼ様、まずはお着替えをお手伝いいたしましょう」

キラキラと目を輝かせたシンシア様にそう声をかけられ、私は慌てて「いえ、こちらを脱ぐだけで済みますので」と笑みを返した。

シンシア様は子供の姿となった私を着せ替え人形にして遊ぶのが大好きなのだ。

とっても愛でてくださっているのはわかるのだけれど、中身は十七歳だからあまりに子供扱いされるのは辛いものがある。

そもそもシンシア様は侯爵家の三女で、エリーゼ様のお付きの侍女だ。手を煩わせるわけにはいかない。

「そうですか？」

残念そうなシンシア様を横目に、私はぶかぶかになつて脱げ落ちたドレスの中から、よいしょと短い足を持ち上げて抜け出した。

中にはシンプルでストンとした短いドレスを重ね着しているから、着替えと言ってもそれだけで

終わりなのだ。

脱げたドレスも子供の力で持ち運びできるよう、見た目は華やかながらも軽い素材で、畳んで袋に収納できるようになっている。

「器用なものですわね。あまりにおかわいらしい姿なので、つい手助けしてさしあげたくなつてしまいますけれど」

「短い手足でも、慣れると大抵のことはできるのです。中身まで子供になったわけではありませんから」

脱げたドレスを小さな手でなんとかまとめたところで、ドアがノックされる。エリーゼ様の用事が長引いているため、二時間ほど待つてほしいという言伝^{ことづて}のようだ。

相変わらずエリーゼ様は多忙だ。

「城内を散策されますか？　こちらでお待ちいただくのであれば、私が退屈しのぎにお付き合いたしますが」

シンシア様はどこかわくわくした期待の目で見ているけれど、私は「では、少々出て参ります」と笑顔でやんわり断る。

「残念ですわ。またお時間のある時に、私とも遊んでくださいませ」

私は名残惜しそうなシンシア様の視線を感じながらも、そそくさと部屋を出た。

さて、ぽつかりと時間が空いてしまったけれど、そんな時にいつも行く場所がある。第二騎士団

の修練場だ。

小さな歩幅でぼてぼてと歩いていると時折迷子と間違えられるから、目的を持って歩いているとわかるように堂々とした顔をしていなければならない。

今日も、「ちよつとそこまで」という顔でなにげなさを装い、なんとか誰にも止められずに目的地——第二騎士団の修練場へ辿り着く。

修練場は試合も行われる場所で、周囲にはぐるりと観客席が設えてあった。

試合がない時は見学自由なのだが、今日もそこには誰もいない。

私は一番前の特等席によじ登るようにして座り、修練場に巻き起こる砂埃の中心に目を向けた。

そこにいるのは、スラリとした長身で長い金髪を一つに束ね、涼やかに木剣を振るう一人の騎士。今日も第二騎士団長であるユアンⅡクラディス様は『微笑みの貴公子』の通り名に違わず、切れ長の紺色の瞳に麗しい笑みを浮かべている。たとえば、そこに数人の騎士が剣を構えて突進していたとしても。

「うわああああ！」

「せいやあ——！」

勇ましい掛け声の中に、ユアン様の涼やかな笑い声が響く。

「ははははは、勇ましいのは掛け声だけだね。脇がガラ空きだし、踏み出す足に全然力が載っていないよ。もうへばったのかい？」

「う、うらああああ！」

凶星を指されたらしい騎士が奮起したように飛びかかるが、一瞬で横に吹っ飛ぶ。

「武器が剣だけだと思うなど、いつも言っているだろう？」

繰り出されたのはその長い足による華麗な蹴り。

他の男たちはあっけなく散った同胞にちらりと目をやると、ごくりと唾を呑み込み、覚悟を決めたように続く。

だが次々と軽く剣でいなされ、息も切れ切れになっていく。

ユアン様だけがいつまでも一人涼しい笑顔のまま。

「あっけないねえ。もう終わりかな？ それじゃあ腕立て伏せとスクワットをそれぞれ三十回十セット、最後は柔軟体操もしておくように。屍相手にこれ以上やつても意味がないからね」

変わらぬ笑顔でさらりと辛辣なことを言う。

「お……鬼……」

ぼつりと漏れ聞こえた呟きにも、ユアン様はにっこりと笑顔を向けるだけ。

そう。令嬢たちがユアン様に群がらない理由は、これだ。

その笑顔は確かに麗しいが、涼やかな口元からこぼれる言葉には容赦のないトゲが含まれている。

『毒舌』『腹黒』、それが令嬢たちのユアン様への評価だった。

しかし私は知っている。その毒舌だとか腹黒だとか言われているのは誤解で、ユアン様はいつでもどこでも誰にでも、ただ正直なだけなのだ。

そして大抵のことを楽しんでるから、いつも笑顔なだけ。

よく見れば、その笑みにも種類があるし、さまざまな感情が表れている。とはいえ、私も最初はユアン様の笑顔をうさんくさいと思っていたのだけれど。

訓練を終えてスタスタと扉のほうへ歩いていくユアン様を追いかけるため、私は椅子からびよいつと飛び降りた。気配を感じたのかユアン様は振り返ると、嬉しそうな笑顔でひらひらと手を振り、口をばくばくと動かしした。

『待って』

そうして互いに修練場の出口へ向かい、落ち合う。

けれど彼と会うのは私であって、私ではない。

「お待たせ、ルーシエ。今日も時間があるなら、一緒にお茶をしないかい？」

「はい、ぜひ」

私が笑顔で答えると、ユアン様は嬉しそうに「今日はアップルパイがあるよ」と笑った。

こうして私が子供の姿で『ルーシエ』としてユアン様に会うようになったのは、一年ほど前から。きっかけは、父にこの体質を相談したことだ。

初めて子供の姿になってから、それが一度ならず二度三度と断続的に起こることがわかり、私は意を決して父に打ち明けることにした。

だが父は、子供の姿の私を『ロゼ』だと信じなかった。

必死に説明し、侍女たちも間違いないと真実だと口添えしてくれたけれど、イタズラだと決めつけ

るばかりでまともに取り合わず、私を追いつくとした。

父とは子供時代をほとんどともに過ごしていないのだから無理もないけれど、どこからどう見ても幼かった頃の娘の姿だろうに。

結局、姿が変わるところを目の当たり[※]にさせて無理矢理信じてもらったのだが、すると父は予想外の行動に出た。

見た目は子供で中身は大人な私を、利用することにしたのだ。

父は子供の姿になった私をパーティに連れていき、動向を探りたい一団の近くに一人置き去りにした。子供の姿なら警戒されないからと、スパイにしたのである。

鬼畜か。

転んでもただでは起きないところが私の父であり、人の心中などおかまいなしなところがリリアナの父だなと思った。

けれどいざ会場に入ってしまったえば、案外誰にも怪しまれることはなかった。『社交』のために参加している大人にとつて、子供なんて視野に入らないのだろう。

だがざわついた中で、しかも自分の背よりはるか高いところで交わされるおじさんたちの会話がどろくに耳に入るわけがない。私は早々に任務を放棄し、自棄^{やけ}食いに走った。

パーティとなると体型を気にする淑女たちのために、必ずティルニーという葉野菜などを使ったサラダが器に盛られていて、令嬢たちが退屈しのぎと空腹をごまかすために食べるのだけれど、そんなものでお茶を濁^{にご}す私ではない。

目と同じくらいの高さのテーブルに並ぶスイーツにうんしょと手を伸ばし、端から口がふふと突っ込んだ。

そんなところに声をかけてくれたのが、ユアン様だった。

「君は不思議だね。こんな美味^{おい}しいスイーツを口にして笑顔にならずにいられるなんて」

じっと顔を覗き込み、本当に不思議そうな顔をされて、私は思わず考え込んでしまった。いまのは嫌味だろうか。それともただの疑問だろうか。

彼が微笑みの貴公子と呼ばれる第二騎士団長でクラデイス公爵家のユアン様だとすぐにわかり、なおさら悩んだ。常々彼をうさんくさいと思っていたから。

とはいえ、相手は公爵家の人間だ。ここは無難にやりすごそうと、態度を淑女らしく改めて向かい合った。

「これはお恥^{はづか}かしいところをお見せしてしまいました。実は、あまりにも腹立たしいことがあったものですから。食べ物に罪はないというのに、作ってくださった方にも失礼をしてしまいました」

言ってから気がついた。いまは子供の姿なのだ。あまり大人ぶった話し方をしては怪しまれる。はっとして、どうしようと固まったけれど、ユアン様は気にするそぶりもない。それどころか、心底疑問というように首をかしげた。

「ふうん。甘いスイーツを食べながら別のことを考えられるなんて、器用だね。私だったらいま食べているスイーツのことか、次にどのスイーツを食べようかくらいのことしか考えないな。一体な

ぜそんなに腹を立てているんだい？」

とにかくユアン様がスイーツ好きなことはよくわかったけれど、促^{うなが}されるまま真実を話すわけにはいかない。父の鬼の所業を洗いざらい話せば、この体のことに触れざるを得ないのだから。

実の親ですら信じないのだから、他人ならなおさらだ。話してみたところで、また一笑に付されるに決まっている。

なんと返せばいいか迷っていると、ユアン様は「それなら代わりに楽しい話を聞こうじゃないか」とにつこり微笑んだ。

「愚痴^{ぐち}を吐くのはストレス解消になるけれど、逆のことを考えるのも手の一つ。スイーツを美味しく食べるなら、そっちのほうがいいしね」

楽しい話と言われても急には出てこない。王都に来てからの日々はひたすら教育を受けたり足場固めに奔走^{ほんそう}したりするばかりで、楽しいことなどないに等しかったし。

仕方がなくトルハインツでの思い出話してみると、ユアン様は公爵家次男なのに「懐かしい気持ちになるね」と微笑みながら話を聞いてくれた。トルハインツのことを田舎と馬鹿にしたり、私を蔑^{あやむ}んだりすることもなかった。

それでだんだん調子に乗り、どうせいまの私はロゼではないのだし、と素が出てくるのに任せて、いつもメイシーが私の物を欲しがらる話とか、わがままな姉の話をした。

「はは、人の物を奪って手っ取り早く幸せになれると思うところが短絡的だよね。しょせん人から奪ったものなんて、それだけの価値しかないのに。むしろ、奪ったことで価値が下がるんだって

そろそろ気づかないのかな？」

「自分の我^がを押し通して周りを振り回す人の視野ってどうなっているんだろうね。馬^{うま}くらい視野が広ければまともな行動がとれるのかな。まあ、他人なんてどうでもいいと思ってるんだろうから無意味か」

などなど、にこやかなユアン様の口から次々と辛辣^{しつろう}な言葉が出てきて、私はつい笑ってしまった。『毒舌』『腹黒』と恐れられる『微笑みの貴公子』と聞いていたから、てつきり温和な仮面に本性を隠しているような人なのかと思っただけで、笑顔も毒も、そのままこの人なのだ。

最後に名を聞かれて、とっさに従姉妹^{いとこ}のルーシエの名を借りた。

完璧な淑女として名の知れたロゼ^{ロゼ}リンゼンハイムの名を語ったところで、笑われるだけだから「どこかで会ったことがある気がしたんだけど。こんな小さな知り合いはいないし、人違いだったよだね」

そう言われてドキリとした。

ロゼとして、ユアン様と社交場で挨拶^{あいさつ}や短い会話を交わしたことはある。けれど私の顔など覚えてはいないだろうと高^{たか}を括^{くく}っていた。

脳裏に、子供の姿で「自分はロゼだ」と打ち明けた時の、父の顔が浮かんだ。

なにを言っているんだ、とばかりにこちらを見下し、歪^{ゆが}んだ顔。

あんな顔は何度も見たくない。

「ロゼ^{ロゼ}リンゼンハイムの従姉妹^{いとこ}なのです。似ておりますでしょう？」

につこり微笑むと、ユアン様は「ああ、なるほどね」と納得したような笑みを返してくれた。やはりこの姿で迂闊^{うかつ}に誰かと関わるものではない。

——そう思ったのに。

数日後、エリーゼ様とお茶会で城を訪れた日のこと。その日も時間が空いて、気づけば私は第二騎士団の修練場へ足を運んでいた。

先日騎士団長であるユアン様に会ったことで、久しく剣術に触れていないなあと懐かしくなったからだ。

『おや、ルーシエ。見学かい？ ゆっくり見ていくといい。……ところで、この後少し時間はあるかな。来客の予定がなくなってるね。焼きたてのスコーンがむくわれないのはしのびないと思ってるんだけど、付き合ってくれないかな？』

私を見つけたユアン様は、いいことを思いついたというように嬉しそうな顔を見ると、今日のよう^{よう}に私をお茶に誘ってくれた。

以来、時間が合えば私たちは一緒にお茶をするようになった。

私はユアン様に愚痴^{ぐち}を聞いてもらって、スッキリする。

ユアン様は甘いものが好きすぎて普段は禁止されているけど、私という来客を理由に大好きなスイーツを食べられる。

私たちは互いに利益のある関係になったのだ。

騎士団の人たちもそれがわかっているから、七歳ほどの子供にしか見えない私^{ルーシエ}に、「ユアン様は

働き過ぎなので、ぜひ休憩に付き合ってあげてください。ただ、おかわりは禁止ですし、一口ちょうだいと言われても断ってください」などとお願ひしてくるのだ。

史上最年少で騎士団長に上り詰めた二十三歳のユアン様は、訓練中こそ鬼と呼ばれているけれど、騎士団員にはとても慕^{しん}われている。

ユアン様より年上の人たちも、その誰もが彼の實力を認めていた。なにより、悪気なくものを正直に言いすぎるユアン様を憎めない———というか、見守っているといった感じだろうか。

私には第二騎士団の関係性が少し不思議で、それから羨^{うらや}ましくもあった。仲間という感じがして、見ていると領地にいた頃を思い出す。

王都に来てから私にそんな居場所はなかったから、そこに自分を投影して満足しているのかも知らない。なにより騎士団の中にいる時のユアン様は、いつも生き生きとしている。

そんな姿を見るのが好きだった。

「今日ルーシェが来てくれてよかったよ。来客がなければ、せつかくのアップルパイが無駄になるところだった」

そう言つて隣を歩くユアン様を見上げると、それはそれは嬉しそうに口元が緩^{ゆる}んでいる。

「アップルパイ、好きですものね。でもわかつていると思いますが、おかわりは禁止ですよ」

私も好きだけれど、淑女としてはアップルパイほど食べにくいものはない。こんな時だけは子供の姿でよかったと思う。

「いつまでも口調は硬いままだね。子供なんだから、もっと楽にしていんだよ？」

「子供でも礼儀は礼儀ですから。それに、これでもずいぶん気楽に話させていただいていますし」

ユアン様はびたりと足を止めると、くると私を振り返り、目の前にしゃがみ込んだ。

「本当にルーシェは生真面目だね。だからいつも眉間にそんな皺^{しわ}が寄ってるんだって」

言いながら、ぶすつと鋭く私の眉間を突き、ぐりぐりともみほぐす。

「……いたいです」

「だろうね」

わざとか。

「さて、じゃあ私の執務室へ行こうか」

そう言つてユアン様は、私をひょいと抱き上げた。

唐突な浮遊感に、思わず声を上げる。

「うわあ！」

元野生児でハリボテの令嬢な私は、ここでとつさに「きゃあ」は出てこない。

「うーん。ルーシェは小さいねえ、軽いねえ」

そんなことは気にもせず、ユアン様は私を片手で軽々と抱き上げたまま、執務室へ歩き出す。

ここで短い手足をジタバタさせれば服の中が見えてしまいかねない。

それでも大人しく連れ去られるわけにはいかない。恥ずかしすぎる。

「下ろしてください、ユアンさま！」

「ルーシェの小さな体で歩くより、こっちのほうが早いだろう」

ゆらゆら揺れるのが怖くて思わずしがみつくと、ユアン様がふっと笑ったのがわかった。

そんな優しい笑い方をされるときゅんとしてしまうからやめてほしい。

いつも私が子供の足と体力には広すぎる城内をてこてこ歩いてやってくるから、疲れていることに気づいているのだと思う。

言葉は辛辣^{しんちやく}だし、つまらないイタズラもよくするけれど、やっぱりその気遣いも行動も、『微笑みの貴公子』そのものだ。

その通り名は、見た目と身分を表すだけのものではないのである。

ユアン様は誰も騙^{だま}してはいないし、なにも偽^{いつはり}ってはいない。

ただ人間というものが、人を表面で判断しやすい生き物なだけなのだ。

団長用の執務室に、第二騎士団の補佐官が茶器とスイーツを運んでくると、ユアン様は手慣れた手つきでお茶を淹^いれはじめた。

私がやりますと言っても、これだけは譲らない。

「ユアンさまはわたしを甘やかしすぎだと思います」

「そんなことはない。当然のことをしているまだけだよ」

「お茶だけではありません。先ほどのことです！ あんな、子供のように抱き上げないでください」

「ルーシェは実際に子供なのだから、気にすることは無いのに」

笑みを浮かべながらも至極真つ当というように言うから、からかっているのではなく本心からそう思っているのだとわかるけれど、それでも恥^{はにか}ずかしさが消えるわけではない。

ユアン様がカップにお茶を注ぐと、いい香りが立ちのぼった。

ユアン様が淹^いれるお茶は正直とても美味^{おい}しくて、結局私は素直にカップを受け取る。

「ありがとうございます」

用意してくれたカップは、私の小さな手でも持ちやすい。それも、私にだけ『子供用』として出すのではなく、ユアン様も同じものを使っている。さもこれがこの執務室では当たり前に使うものだということに。

そんな細かい気遣いが嬉しいし、ユアン様が淹^いれるお茶とスイーツのいい匂いで満たされたこの空間は、とても居心地がいい。

カップを口元に運ぶと、スツキリとした、でも華やかな香りがする。

私はあまりお茶に詳しくないのだけれど、いつもスイーツに合わせたものを選んでるように、お茶とアップルパイを交互に口に運ぶと至福だ。

アップルパイはリングの酸味を残しながらも砂糖で煮詰めた甘さが口に広がり、それをお茶がスツキリと流してくれて、延々と食べ続けられそうだ。これはユアン様が食べすぎてしまうのわかる。

「それで、あれからリリアナ嬢の様子はどうか？」

「いまはリンゼンハイム伯爵が動いたおかげで大人しくしているようですが、それもいつまでもつやらずね」

「まさに眠れる獅子だね」

それは言い得て妙だ。

「まったく、病で臥せっているはずの人間が夜会へ行くようなドレスを何着も買い集めて、いつ着るのかと問い詰めたところです。大量の指輪はどこに嵌めるんでしょうか」

「ドレスは家でも着られるし、指は二十本あるからね」

「普通、病弱を装って領地に引きこもったなら大人しくしてますよね」

「普通はね。普通じゃないから家を潰しかけるし、家族が苦勞しているんだろう」
思わず大きなため息とともに頷く。

そんな私の愚痴の最中にも、ユアン様はくすくす笑いながらアップルパイをさくさくと優雅に切り分け、口へ運ぶ。

その顔がとろりと笑み崩れるのを見ると、餌付けしたくなる公爵家シェフの気持ちもわかる。

けれど、そのせいで家と騎士団の監視の目があるところではスイーツが食べられなくなったそうなので、両者ともお気の毒にとしか言えない。

つまり、こんなとろけた笑顔を見られるのは、いまや私くらいなわけで。独り占めである。

「領地が暇で耐えられない、綺麗で素敵なものに飢えて心を慰める必要があるとか言ってるんだらう？ それなら、代わりに領地経営を行って税収を上げる工夫でもすればいいのにね」

「そんな話を通じたら、苦勞しないんですけどね」

アップルパイはこんなに美味いのに、ため息しか出なかった。

ジョセフとメイシーのことが片づいても、血縁であるリリアナはそう簡単にいかない。

いまは父の命令で、リリアナが商人を呼んでも屋敷に入れないようになったのだけれど、このままいつまでも大人しくしているとも思えない。

それにリリアナの散財に気づいた父が動き出しても、失われたお金はほとんど戻らなかった。父がトルハインツの屋敷に踏み入る前に、買いこんだ宝石は綺麗に隠されており、どれだけ邸内を探しても見つけれなかったのだ。

隠し財産を作るにはまだ若すぎるだろうに。

隠しようがないほど部屋を占拠するドレスはごっそり売り払ったけれど、それだけでは先行きの不安は拭えなかった。

それで私が興じた事業というのが、リンゼンハイム家の領地トルハインツの特産物を扱うお店。領地の経済も回せるし、我が家も利益が得られるし、一石二鳥だ。

ただし、田舎を蔑む王都の貴族たちはそこで作られた食べ物すら受け付けないから、イメージ戦略が大切だった。

幸いにも、王都のお店のほとんどは王都のものを扱うのが当たり前ゆえに産地なんて明示しない。だから、わざわざトルハインツ産であることは示さなくて済んだ。

ただし長く隠すほど明るみに出た時に騒ぎになるから、信頼が築けた人からトルハインツ産なの

だと明かしていき、少しずつ受け入れられるようにしていこうと考えている。

やっと軌道にのり、いまはほとんど支配人に店を任せているけれど、そういう理由もあって定期的に様子を見に行っている。

「本当にロゼ嬢は真面目だよ。そんなものは本人に穴埋めをさせればいいのに、自分でお店を起ち上げてしまうとは」

「ただ腹立ちを原動力に変えているだけです。どうせ動かぬ石にどれだけ労力をかけても無駄骨です。それよりも、継続して収益が入ってくる路を整えたほうが建設的ですし、家全体のためにも、自分自身のためにもなりますから」

「そこまで現実が見えているのに、腐らずまっすぐに動くだろう？　そういうところがすごいと思うよ」

「腐っても自分に利益はありませんし、なにも解決はしませんから……と、わたしも思います」

うっかり自分のことのように話してしまい、慌てて言い足す。ごまかすように足をぶらりとさせれば、地面は遥か遠く心許ない。

感心するように言われてしまうとむずがゆいものがあつた。

別に褒められるようなことではない。

うまくストレスも解消できずに体が縮むなんて非現実的な事態を招いてしまうし、こうしてユアン様やエリーゼ様にさんざん愚痴を聞いてもらったりして、なんとかやれているのだ。

「で、姉君が変わらないということは、今回は誰にどう振り回されたのかな？」

そう言ってユアン様は面白そうに頬杖をつき、私の目を覗き込む。

「ちよつとわくわくしてませんか？」

「今日はいつにも増して饒舌だし、ため息も多いだろう。相当のことがあつたんだろうなと思つてね」

ご明察である。

「婚約破棄ですよ」

投げやりにそう答えると、ユアン様は驚いたように目を見開いた。

「なにがどうなって、そうなったんだい？」

少し動揺した様子で聞き返されて、はつとした。

まだ子供のルーシェが婚約破棄をされたなどというのは不自然だ。慌てて再び口を開く。

「わたしの話ではありません、いつものロゼの話です」

「完璧と称されるロゼ嬢が？　普通、彼女を自ら逃す婚約者なんていないだろう」

「その完璧さが彼にとっては欠点だったようですよ」

「そんな馬鹿な！」

それが本当のことなのである。

「隣にいるのが窮屈だとか。君のような完璧すぎる女と結婚したがる男なんていないだろうからこれから婚活に苦労するだろうが、それでも自分は新しい恋人を支えたい、というようなことを言っていたそうです」

「そうか、馬鹿なんだな……」

やや呆然としていたユアン様が納得したように呟いた。

その様子がおかしくて、その言葉が嬉しくて、思わず笑ってしまう。

人がこれまでできてきた努力の結果を欠点のように言われて少々腹が立っていたから、気が晴れる。「最初はロゼ嬢をまともな教育を受けていない田舎者と見下していたくせに、努力をしたら今度は完璧すぎて自分が見劣りするようになったから苦痛だど？ まったくもって彼には宝の持ち腐れだね。彼は一生幸せにはなれないよ。自分がなにを求めているのかもわからず、自分が何者かもわかっていない。その上自分はなにもしていないのに、他人を批判することで一端の人間になったつもりでいるのだから」

その口調は硬い。ユアン様も若くして騎士団長を務めるくらいに努力をしてきた人だから、それを否定するような言葉に腹が立つのだろう。

しかしふっと笑みを浮かべると、口調を改めて椅子にもたれた。

「しかし、虫よけとしてちよいどいいかと思っていたけれど、自らこんな流れを用意してくれるとは感謝しきりだよ。おかげで手間が省けた」

虫よけ？ 手間？

なんの話だろうと思っただけで、ユアン様はなぜかとても楽しそうに笑みを浮かべていていつになく饒舌だったから、小さな疑問は流れてしまった。

「彼にはずいぶん入れ込んでいる相手がいるらしいと噂で聞いたけれど、どうやら本当だったよう

だね。目の前にロゼ嬢のような人がいるのに、よくよそ見なんてできたものだ」

「彼女を守ってあげたいのだそうですよ。そしてロゼにはそういう隙がないから、彼にとって『いい婚約者』ではないのだろうと、以前エリ……、王女様もおっしゃっていました」

危うくエリーゼ様の名前を出しかけて、言い直す。ロゼならぬルーシェの身としても、王女の話し相手に呼ばれて城へ来ているのだと話しているけれど、年の離れたエリーゼ様では不自然なので、第四王女様の相手ということにしているからだ。

メイシーとジョセフに関する噂を聞いた時エリーゼ様は、『男とは庇護欲をそえられる相手を好きになるものなのよ。まあ彼の場合は単なる逃げでしょうけれど』とも言っていた。

リリアナは病弱だから守ってあげたい。メイシーは一人では生きていけないから守ってあげたい。ジョセフが好きになった相手を思い浮かべると、なるほどと思う。

私はそんな弱点のような『隙』があるのなら、極力潰したい。誰かに頼って生きなければならぬのは窮屈だ。性に合わない。

ユアン様は、「わかってないなあ」と楽しそうに笑った。

「そんな誰にでも見えるようにさらけ出している隙なんて、私は魅力には感じないけどね。どんなに完璧に見えても、仮面を被っていても、好きになると隙は見えてくるものだし、自分にだけそれを見せてくれるから嬉しい。私はそう思うな」

「本当に完璧な人間なんていませんしね」

「そう。だから人は支え合って生きるんだよ」

その言葉に、私はどこか救われた気持ちになった。

これまで私を助けてくれる人はいなかったから、自分のことは自分でなんとかしなければと思いきてきた。

だから必死に勉強し、必死に淑女の仮面を作り上げたけれど、中身はいつまでも野山を駆け回っていた頃のまま。本当の完璧になてなれるわけがない。

けれど、完璧でなくても、すべて自分で行うことができなくてもいいのなら。

婚約者がジョセフのような人間だったからなにも求めていなかったけれど、もし自分で相手を選ぶのなら、ユアン様が言うように、お互いに支え合える人と結婚できたらいい。心が通じ合えたらなおいいけれど、そんな人が都合よく現れはしないだろう。

そんなことを考えてぼんやりしていると、ユアン様が「それで、その婚約の解消は決定したのかな？」と話を戻した。

「いえ、まだです。彼の様子ではロガート伯爵の許しを得ていないでしょうから。ただ、乗り気ではなかった父——いえ、叔父にロゼから手紙を出したそうなので、くつがえることはないでしょうね」

相手から言い出したことで、しかも浮気が原因だと知ればこれ幸いとさっさと解消手続きをしてくれるに違いない。ロガート伯爵とて息子のしでかしたことのだから受け入れるほかはないはず。

「そう。彼が愚かな男で本当によかったよ」

ユアン様のそれはそれは楽しそうな笑みを見ながら、小さな手で思わず目をこすってしまった。

とても瞼が重い。

「眠くなったかな？」

「はい、申し訳ありません。そろそろお暇させていただきます」

さくさくのアップルパイでお腹が満たされたせいだけではない。

実は私は、長く人と喋っていると眠くなってしまうのだ。もちろん、アップルパイに菓が盛られていたとかそういうことでもなくて、相手が誰でも、どんな場所でも、いつもそう。

おそらく、人付き合いに慣れない私は疲れやすいのだと思う。子供の体だからなおさらかもしれない。

ユアン様と話すのはとても楽しくて、その分たくさん喋ってしまうせいもあるだろう。

相手がユアン様だどこか気が緩んでしまう。すっかりしなくては自分を戒めてみても、だんだん瞼を持ち上げられなくなっていく。

慌てて椅子から飛び降り、退室の礼を取ろうとしたけれど、あつという間にひよいと抱きかかえられていた。

「子供が遠慮するものではないよ。王女との約束の時間になったら起こしてあげるから、少し休むといい」

「そんなわけにはまいりません」

「疲れているから眠くなる。眠いから寝る。シンプルな話だろう？」

「ですが——」

なお言い募^つろうとしたけれど、ユアン様は私をソファにそっと寝かせた。

「疲れている子供をこんなだっ広い城の中に放り出したら、部下たちから冷たい上司だと思われるてしまうだろう？　気が咎^{とが}めるなら、『優しい騎士団長』という印象向上に一役買ってくれていると思えばいい」

なにか言おうとしても、言葉はもごと口の中に沈んでいく。横になってしまえばもはや眠気には抗^{あらが}えない。

いつもいつも、ユアン様は私に甘い。

だから、つい私もユアン様に甘えたくなくなってしまふ。

そんな風に思える人は、私にとってただ一人だった。

優しく頭を撫^なでながら声をかけられ、はっとして目覚めると、約束の時間の少し前だった。

がばりと体を起こそうとしたら、ユアン様の長い指がどすつと額に突き刺さり、ぐえつとソファに押し戻される。

「いきなり頭を起こすと危ないよ。ゆっくり起きるように」

「はい……。本当に眠^いってしまい、ご迷惑をおかけしました」

「なんの迷惑もないよ。ただ子供が一人ソファで寝ているだけで、私はいつもと変わらず書類仕事をこなしていたのだから」

「ですが――」

「むしろ私は、先ほど美味^{おい}しいアップルパイをいただいたからやる気に満ちているくらいだ。それに、早く仕事を片づけなければならぬ理由もできたしね」

急な用事でもできたのだろうか。そう言っつてにつこりと笑まれば、丁寧に敬礼を伝えるしかない。

「多忙な折に休ませていただき、ありがとうございます」

「送ろうか？」

「めっそもありません」

向かう先がエリーゼ様のもとだとバレてしまふ。

慌てて全力で首を振ると、ユアン様は「もっと甘えてくれればいいのに」と苦笑して見送^{みおく}つてくれた。

そうして私は再びエリーゼ様とお茶へ向かったのだけれど。

「完璧すぎて婚約破棄されたなんて、さすが口ゼね。本当にあなたの話は飽きないわ」

話を聞いたエリーゼ様は、思った通りそれはそれは楽しそうに微笑んだ。

整った目鼻立ちに、□元のほくろが女性でも見惚^{みと}れてしまうような色気を添えている。

鮮やかな青のドレスにエリーゼ様の明るい金髪がよく映えて、他の令嬢たちとは圧倒的に存在感が違う。

こうして話していると、ただ好奇心が強い女の子のようだけれど。

「時間の問題だとは思っていたし、理由も想像していた通りではあったけれど。『完璧すぎて婚約

破棄』という言葉が衝撃的でいいわ。思い出すだけでしばらくは笑っていられそう」

ユアン様もエリーゼ様も遠慮なくズバズバ言うところは同じだけれど、ただ違うのは、エリーゼ様は完全に私を面白がっているということだ。

第二王女であるエリーゼ様のほうが私よりもよほどストレスを受けていると思うのだけれど、こうしてそれを解消しているのかもしれない。

私がエリーゼ様に呼ばれてお茶をする時、部屋にはお付きの侍女シンシア様と三人だけ。

つまり、エリーゼ様が飽きるまで遠慮なくあれこれ聞かれるということ。

そんな相手に「婚約解消を突きつけられました」などと言えば面白がって根掘り葉掘り質問攻めされることはわかりきっていた。

けれど隠したところで婚約解消したことはいずれ知れ渡ることだろうし、耳の早いエリーゼ様ならなおさらだ。

後から噂を聞きつけて、黙っていたことを迫力のある笑顔で咎められるより、自ら話してしまっただほうがいい。

そうして素直に聞かれるまま一通り話し終えると、エリーゼ様は満足そうに微笑んだ。

「ロガート伯爵も息子の勝手を聞いたら激怒するでしょうね。たいそうロゼを気に入っていたもの。

あとは、これまで見えていなかった都合の悪い事実が見えてきた時に噂の彼女がどう立ち回るか、見ものだわ」

輝かんばかりの笑顔だ。完全にジョセフとメイシーの行く末を面白がっている。

